

総論

総論

大西拓一郎

1. ガイドブックのねらい

本書は方言文法を調査・記述する際の主要な視点を具体的な項目や資料とともに提示するものである。このガイドブックを利用することで、各地方言におけるそれぞれの文法分野の中核的部分が、ひととおり記述できることをめざしている。

大学の修士課程レベルはもちろん、学部レベルでも高度の研究に挑もうと考える人、また、一般の人でも論点の把握につとめれば、文法上の問題点をおさえながら一定のレベルでの研究が進められると期待する。

2. 各章について

本書は文法分野別に独立して章立てしている。それぞれがステップを踏んで進んでいくという性質にはない。したがって、読者の関心に従って、必要な箇所を読み進み、研究を進めればよい。

なお、琉球に関しては、各文法分野が本土方言と同レベルで扱えるとは限らないことから、別立てにして章を設けている。しかしながら、普遍的な問題点に大きな差はないはずで、琉球を対象にする人も関連分野の章を参照し、また、本土を対象とする人も琉球の章に一度目を通しておくとよいだろう。

3. 分野の設定

本書は、文法に関するすべての分野をカバーしているわけではない。本書で扱わなかった分野であっても研究上、重要な分野は存在する。例えば、推量・様態などといった分野は、独立した形では扱っていないが、これらも十分に研究対象となる分野である。関連する章(例えばモダリティ)を参照しながら平行的に問題点を整理し、挑戦していくことを望む。

4. 調査項目の利用・改変

それぞれの章で具体的な調査項目が設定されているが、それらは絶対的なものではない。対象となる方言にはそれぞれの体系上の背景があるはずで、それが、本書の調査項目とは微妙にずれることは十分に予想される。また、各自の研究テーマにおける問題の設定と本書の項目が適合するとも限らない。各地方言や研究者自身の事情にあわせて改変して利用することを推奨する。

なお、以上の改変を含めて本書の利用は自由であるが、利用のむねを論文・著書に記載していただくと幸いである。

5. その他

本書は、文法記述を念頭において編集している。文法記述のためには対象となる方言の音韻の記述は、クリアしていることが前提である。音韻記述がなければそれぞれの方言の表記ができない。最低限、それぞれの方言で区別のある音は聞き分け、書き分ける能力をもって臨んでほしい。また、文法記述とは言っても語彙、その他の言語事象から完全に独立しているとは考えないでほしい。場合によっては、言語行動や生活事情が有意味に機能することもあるはずだ。それぞれの地域に入ったら、面倒がらず、広くさまざまなことに興味を持って地域に接してほしい。ひいてはそれが、文法問題の解決に結びつくこともあるはずだ。そんなことからこそフィールドワークの面白さが実感されるものなのである。

6. ガイドブック作成の経緯

本書は科学研究費基盤研究(B)(2)「文法体系のバリエーションに関する対照方言学的研究」(1998-2001年度、課題番号 10410097)研究成果報告書である。

科研費の報告書としては、いっぼう変わっているが、このような報告書に至った経緯を簡単に説明しておく。

この研究課題ではメンバーが集まって、方言文法に関する問題点をさまざまに持ち寄り「方言文法調査委員会」(略称 DGC=Dialect Grammar Conference)と証する研究会を年数回開催していた。この DGC は、1998年7月から2002年1月まで、合計9回にわたって開催された(発表件数28)。その他に科研費の開始前から所内のメンバー(時には所内に滞在していた木川行央氏やピーターヘンドリクス氏といった在外研究員もまじえて)で2~3カ月に1回の割合で DGT と称する小研究会を開催していた(Tは茶話会に基づく)。小研究会の方は、その後、所内のメンバーが極めて多忙になってしまったため、先細りしてしまっただが、メンバー相互の関心のありかを気楽に語りあえる研究会で、意外に知られていない方言文法上の事実が発見されたりして、面白いものであった。その他、科研費の分担者に協力者も加わったメーリングリストを開催したりもした。

このように研究発表を重ねるうち、課題初年度の終りごろだったと記憶するが、研究発表を続けるだけでよいのか、全体としての目標を定めるべきではないかという声があがった。声をあげたのは、渋谷勝己氏ではなかったかと記憶する。

そのころ大西も自身が国立国語研究所でおもな仕事としている『方言文法全国地図』の項目設定に問題を感じており、将来的な全国方言の調査のための項目設定の準備の必要性を感じていた(大西 1998b)。そのような項目の設定には、基礎研究に裏打ちされた、つまり、研究上の位置付けが明瞭な項目を作成する必要がある。ある意味で恣意的な項目設定は後世を迷わせ苦労させることを身に染みて感じていたからである。

ここから具体的な項目を持つ方言文法に関するガイドブックが発想された。課題期間2年目にあたる1999年8月の第4回と2000年3月の第5回の DGC で大西がこの点について発表している。

総論

そしてそれをもとにしながら、メンバーそれぞれの専門分野を中心に分担して作成にあたった。

ところで、大西の将来的な調査の構想は、ネットワークによる調査、JDnet 構想につながっている(大西 2000,2002)。この構想の中の標準項目(SI=Standard Items)の設定が、ガイドブックに収めた各項目に結びつくものである JDnet 自体がまだ実現していないこともあって、本書の執筆メンバーも十分に認識しているかどうかあやういではあるが、実は、未来に向けた研究の流れ全体の中では、本書はこのような位置付けにある。

本研究は、時に迷走しながら(初年度の代表は、井上優氏であったが、2年目に氏が中国に出張することになり、大西に代表が交替、その後氏は研究協力者として参加)、またメンバーをふくらませながら進展してきた。協力者についてふれておくと、本書の執筆メンバーのうち、沖裕子氏は2000年度途中(当時、国語研究所に内地留学中)からDGCに参加している。また、小西いずみ氏(大西の章の資料作成に協力した)は、2001年1月から参加した。伊豆山氏は、研究の立ち上げ時から協力者として参加してきた。

DGCは研究会として開催し、常に予定時間を大幅に超過しながら実施して来た。中には長時間にわたるため(また、午後5時に切れる国語研究所の空調に悩まされつつ)、いらいらしながら参加したメンバーもいたかもしれない。しかし、ほぼ制限時間なしで続けられる議論は、このような基礎研究を固めるためには不可欠で、実際のところかなり役立ったのではないだろうか。

本書の内容は、文法調査のガイドブックとしては、まだまだ不十分である。これは章立てをメンバーの関心に従って設定したことに起因する。3.にも記したように推量や様態といった典型的なモダリティ項目が独立しては扱われていない。待遇も扱われていなければ、命令や意志もない。このような不十分な点は、もし許されるなら、DGCを継続する形で補い、新版、または、第2巻、第3巻として、ガイドブックを改めるか、継続させることを考えたい。

最後になったが、本書のテンス・アスペクト関係の項目は、工藤真由美氏の研究に負うところが大きい。本書への利用を許可いただいた工藤氏に感謝する。

7. 成果

メンバーから申告を受けた科研費課題期間4年分の成果を列挙する。各自執筆の章と結びつく内容のものもあるだろう。参考にしてほしい。なお、期日までに申告が間に合わなかった成果もあるはずなので注意してほしい。

[井上優]

井上優(1998)「富山県砺波方言「ジャ」の意味分析」『日本方言研究会第66回研究発表会発表原稿集』

井上優(1998)「方言の終助詞の意味 富山県砺波方言を例に」『言語』27-7

井上優(1998)「富山県砺波方言の終助詞「ジャ」の意味記述」『日本語科学』4

井上優(2002)「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』21-2

総論

[大西拓一郎]

大西拓一郎(1998a)「動詞活用の対応と比較」『言語』27-7

大西拓一郎(1998b)「文法地図の課題と将来 サ変動詞「する」の東北方言における分布と解釈をめぐって」『国立国語研究所創立50周年研究発表会資料集』

大西拓一郎(2000)「方言研究とネットワーク JDnet 構想」(第89回変異理論研究会, 安田女子大学)

大西拓一郎(2002, 印刷中)「全国型資料と調査の課題 JDnet 構想」『方言地理学の課題(グローター神父追悼論文集)』(明治書院)

[小林隆]

小林隆(1999)「種子島方言の終助詞「ケル」」黒田・中村『ことばの核と周縁 日本語と英語の間』(くろしお出版)

小林隆(2000)「仙台市方言の文末形式「ケ」」遠藤好英『語から文章へ』(東北大学国語学研究室)

[渋谷勝己]

渋谷勝己(1999)「山形市方言の文末詞八」『阪大社会言語学研究ノート』1.

渋谷勝己(2000)「徳島県海部郡方言の可能表現」『阪大社会言語学研究ノート』2

渋谷勝己(2000)「山形市方言の文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2

渋谷勝己(2001)「山形市方言における確認要求表現とその周辺」『阪大社会言語学研究ノート』3

渋谷勝己(2002)「山形市方言の談話マーカ「ホレ・ホリヤ;アレ・アリヤ」」『阪大社会言語学研究ノート』4

[日高水穂]

日高水穂(1999)「ことばに関するアンケート調査 1997-1998」『秋田大学ことばの調査(第1集)』秋田大学教育文化学部日本・アジア文化研究室(私家版)

日高水穂(1999)「秋田方言の仮定表現をめぐって バ・タラ・タバ・タッキヤの意味記述と地域的標準語の実態」『秋田大学教育文化学部研究紀要』54

日高水穂(2000)「文法化の過程と地理的分布 対象格助詞コト・トコ類の分布と変遷」『日本方言研究会第70回研究発表会発表原稿集』

日高水穂(2000)「東北方言のテンス・アスペクト体系の分布と変遷」変異理論研究会(編)『徳川宗賢先生追悼論文集 20世紀フィールド言語学の軌跡』

日高水穂(2000)「秋田方言の文法」秋田県教育委員会編『秋田のことば』(無明舎出版)

日高水穂(2001)「方言研究への招待 文法の調査法<その2> 文法的な意味・機能についての調査」『言語』30-5

[伊豆山敦子]

伊豆山敦子(1999)「八重山・宮良方言動詞言い切りの形と意味・用法 琉球方言のテンス・アスペクト・モダリティー研究のために」『獨協大諸学研究』2-2

伊豆山敦子(1999)「琉球方言動詞言い切り形の比較研究 動詞成立史研究のために」『マテシ

総論

- ス・ユニウェルサリス』(獨協大学外国語学部言語文化学科)1-1
伊豆山敦子「琉球・八重山(石垣宮良)方言条件表現のアスペクト・モダリティー的側面」『マテシス・ユニウェルサリス』2-2
伊豆山敦子(2001)「琉球・八重山・石垣(宮良)方言の動詞言い切りの形」『アジア・アフリカ文法研究』(東京外語大アジア・アフリカ言語文化研究所)29
伊豆山敦子(2001)「八重山(石垣宮良)方言の「過去」をめぐる問題点」『マテシス・ユニウェルサリス』3-1
伊豆山敦子(2002)「琉球・宮古(平良西仲)方言の名詞語末音と語形変化」『マテシス・ユニウェルサリス』3-2

【付記】

本書は、科学研究費基盤研究(B)(2)「文法体系のバリエーションに関する対照方言学的研究」(1998-2001年度、課題番号 10410097)の研究成果報告書として当初印刷したものであるが、継続性の高い研究課題、科学研究費基盤研究(B)(1)「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」(2002-2005年度、課題番号 14310196)での利用のため、内容に修訂を加えず増刷したものである。

(2002年12月 大西記)